

巻頭言

杏林大学医学部 渡 邊 卓

巻頭言執筆の依頼を受け、過去5年分の本誌の巻頭言を改めて読ませていただきました。当然のことではありますが、そこには、本誌の巻頭言にふさわしい重要な内容が、筆者それぞれのお立場、ご経験にもとづいて書かれていました。

医学部感染症学の神谷教授は、特に若い杏林医学会員に対して「技術」を磨き、地道な研究を「忍耐」強く継続することの重要性を強調され、その結果が、「資金（グラント）」や「幸運」に結びつくとして述べておられます。そして、その成果を論文として発表することによって、初めて研究は完結するものであると保健学部の丘島教授は述べておられます。特に初学者は、先ず日本語できちりとした論文を書くことが、いずれ英語での論文執筆の基礎となることも強調されています。医学部眼科学の平形教授は、医師が症例報告を行うためには、科学研究やその論文作成と同様の思考過程が必要であり、従って、自らの経験した症例一例一例を大切にしながら積極的に症例報告を行うことが、すなわち科学論文執筆のためのよい訓練にもなると説いておられます。

他の多くの科学雑誌と同様、本誌も諸般の状況を考慮して2007年度以降、電子ジャーナル化されています。従来の冊子体と電子ジャーナルは、それぞれ長所、短所がありますが、その中で、掲載までの大幅な時間短縮は電子ジャーナルの大きなメリットの一つだと思われれます。医学部解剖学の松村教授はこの点に関連して、ともすれば先陣争いや功名心に流され、研究自体が拙速となる可能性について、強い警告を發しておられます。また、コンピューター上で容易に可能な写真の修整など、コンピューター時代における研究倫理の侵害についても強い懸念を表明されておられます。

後藤前医学部長は、杏林大学における医学、保健学、看護学研究について、重要な指摘をされています。本学における研究の活性化、ひいては本誌の活性化のためには、医療活動、教育活動の中で行われる本学での研究活動の位置付け、あり方といった点に関する議論が必要ではないかとのご意見があります。

研究を志す若い杏林医学会員はもとより、研究を指導する立場にある会員にとっても示唆に富む内容であると思います。会員諸氏におかれましては、是非、過去の巻頭言を改めて熟読されることをお勧めいたします。